

自然等の地域資源を活かした温泉地の活性化に向けた提言骨子（案）  
～「新型湯治」と「新型湯治推進プラン」の提案～

提言の構成（案）

1. はじめに
2. 温泉地をめぐる現状
3. 温泉地活性化に向けた課題
4. 温泉地活性化に向けて ～「新型湯治」と「新型湯治推進プラン」の提案～
5. 新型湯治推進プラン

（参考資料）

1. 事例集
2. 各種データ

## 1. はじめに

・この提言の目的（日本は温泉大国と言われているが、それはなぜか。湯量や多様な泉質はもちろんだが、温泉が持つチカラと温泉地が果たしてきた役割を振り返りつつ、温泉地再生に向けた（温泉地及び環境省への）提言を示す）

・温泉の定義/役割

（温泉とは国民共有の資源であり、温泉地の核となるもの、かつ将来世代に引き継ぐもの）

（温泉の効能関係の記載）

・温泉地の果たしてきた役割、なぜ今温泉地なのか（温泉地である必然性とは）

（いわゆる「湯治」から観光資源へ、そして温泉地全体の資源を活かした保養・健康増進へ）

（なぜ今温泉地であるのかについては、①温泉地の「療養効果」、②旅行先としての高いニーズに挙げられる、（単なるリゾートではなく）温泉地でこそ出来ることがあるのではないか）

・（温泉資源や活性化に関して）環境省に求められる役割

## 2. 温泉地をめぐる現状

以下の基礎資料をもとに記述。

- ・温泉地数（10年ごと程度の経年変化、地域別データ）
- ・源泉数（自噴、動力別）
- ・湧出量（自噴、動力別）
- ・温泉利用宿泊施設数/公衆浴場数
- ・温泉地宿泊者数
- ・国民保養温泉地の指定数と宿泊者数
- ・（旅行形態の）集→個への変化
- ・高齢化や過疎化などによる人材不足
- ・訪日外国人消費動向調査等

## 3. 温泉地活性化に向けた課題

旅行形態が団体旅行から個人旅行に変化しており、交通網が発達して日帰りが容易になるなど、温泉地をとりまく状況は大きく変化しているが、多くの温泉地がそれに対応できていない。

温泉地には、温泉のみならず、自然、歴史・文化、食といった多様な地域資源

があるが、これらをより活かしたプログラムを楽しめる状況になっていない。結果的に旅行者の多様なニーズに対応できず、温泉地に訪れることが減少する悪循環に陥っているケースが存在する。

また、温泉地自体に魅力があること、温泉資源や地域資源あつての温泉地であること、またその基盤を支える仕組みが重要であるが、これらが構築されないことも多い。

さらに温泉地では、湯治といった独特の文化が形成されているが、温泉地全体の療養効果といった把握を行うことで、より温泉地らしいプログラムを生み出し、またそれが温泉地の魅力につながる好循環となっていくことも重要ではないだろうか。

### ＜温泉地活性化に向けた課題＞

- 地域資源を活かした多様なプログラムが不足
- 温泉地自体に人の回遊を生むための仕掛け等がない
- 温泉地として将来を見越した計画が無い
- オーバーユース等による質の低下（資源の劣化）
- 温泉の過剰採取等による温泉資源の減少の可能性
- 地域の基盤となる観光消費額を上げ、経済的な好循環を生み出す仕組みとなっていない
- 温泉地全体の健康増進効果やリフレッシュ効果のエビデンス不足

## 4. 温泉地活性化に向けて ～「新型湯治」と「新型湯治推進プラン」の提案～

本会議では、現代のライフスタイルに合った温泉の楽しみ方を「新型湯治」と位置づけ、「新型湯治」を提供する場としての新しい温泉地のあり方、環境省や関係機関に求めることを「新型湯治推進プラン」として提案する。

### ＜新型湯治＞

- 温泉地訪問者が、温泉入浴に加えて、周辺の自然、歴史・文化、食などを活かした多様なプログラムを楽しみ、地域の人や他の訪問者とふれあい、心身ともに元気になること
- 年代、国籍を問わず楽しむこと
- 長期滞在を行うことが効果的

### ＜新型湯治推進プランの三本柱＞

- 温泉地にある地域資源を活用したプログラム、他の温泉地や国立公園等と連携したプログラムなどの温泉地で過ごす時間が豊かで、かつ心身ともに元気

になるためのプログラムを提供する。**【楽しく、元気になるプログラムの提供】**

- 旅館から街への人の流れを創出する仕掛け等を通じたにぎわいの創出や、地域資源の一体的な評価や保全等を通じた地域資源の持続的な利用を図る。

**【温泉地の環境づくり】**

- 温泉地全体で得られる療養効果の把握と普及を通じて、温泉地滞在の価値を高めていく。**【「新型湯治」の効果の把握と普及、全国展開】**

## 5. 新型湯治推進プラン

「新型湯治推進プラン」の実施をはじめとする温泉地活性化は、地域が主体となって取組を進めることが基本であるが、環境省は、「新型湯治」の考え方を普及し、「新型湯治推進プラン」への理解者・協力者を募り、国民保養温泉地をはじめとする日本全体の温泉地を盛り上げる役割を担うべきである。

4. で掲げた「新型湯治推進プラン」の三本柱の実現のために、具体的に実施すべき内容を以下に述べる。

### (1) 楽しく、元気になるプログラムの提供

ここで提案する「新型湯治」とは、従来の「湯治」のイメージであった「主に温泉入浴を中心とした療養」を含みつつ、より積極的に周辺の自然環境や歴史・文化、食等に触れ、アクティビティを行うことである。

**【具体的な取組例】**

- ・ 自然環境、歴史・文化、食などの地域資源を活かした元気なプログラムの提供
- ・ 多様な温泉地連携の構築により、情報発信力等が高まり、温泉地滞在の契機を創出
- ・ 温泉地を拠点とした周辺の国立公園、世界遺産や文化財などを巡る広域周遊ルートを設定
- ・ 特に、国立公園ではインバウンドを推進する国立公園満喫プロジェクトが進んでおり、連携することによる相乗効果を期待
- ・ 泉質を活かした入浴プログラムや、温泉での湯中運動等の温泉を活かした新たな入浴プログラムの開発等が重要である。

### (2) 温泉地の環境づくり

#### ① にぎわいの創出

温泉地の中心となるのは一般的に旅館やホテルであるが、温泉地でのにぎわいを創出するためには、地域全体で訪れる人を迎え、温泉地を「人と人をつ

なく場」とすることが重要であり、街に人を出す仕掛けが必要である。

【具体的な取組例】

- ・ 温泉地のマスタープランづくり
- ・ 外湯めぐりの充実など、旅館だけの滞在から街に人を出す仕掛けづくり
- ・ 五感で感じられる温泉街づくり（湯けむり、湯畑、手湯、足湯など）
- ・ 特別な場所に来たことを感じさせる演出
- ・ 年代、国籍を問わず、長期滞在しやすい宿泊プランづくり
- ・ 温泉地全体でインバウンドを受け入れるための仕組みづくり
- ・ 人づくり、体制づくり

## ② 資源の一体的な評価と保全

温泉、周辺の自然環境、歴史・文化、食などの資源を一体的に評価し、活用することが重要である。また、これらの資源は、温泉地にとっての生命線であるとの認識に立ち、温泉地自らが資源の状況を随時把握し、保全を図る意識を持つ必要がある。実際の保全の取組は、地方公共団体等の行政機関との連携が重要である。

【具体的な取組例】

- ・ 自然、歴史などの地域の資源の状況を把握し、活用のルール化等により持続的な利用を図る。
- ・ 温泉資源の適切なモニタリングを継続することにより、資源の状況を把握し、利用量の調整を行うなど、温泉資源の持続可能な利用を図る
- ・ 資源量等に応じて温泉の集中管理を行う
- ・ 温泉熱のカスケード利用など、再生可能エネルギーとしての温泉資源の有効活用を図る
- ・ 源泉の状況やモニタリング情報を公開し、資源の見える化や学習機会の提供

## ③ 環境づくりのための財源の確保

「新型湯治推進プラン」の実施は、地域での経済活動の好循環を描くことが必要である。しかしながら、資源の持続的な利用やにぎわいのある温泉地づくりには、一見すると利益に結びつかない活動も重要であり、両者を俯瞰的に眺め計画を実現してくための仕組みが必要である。

【具体的な取組例】

- ・ 地元金融機関等と協力した地域会社の設立等により、地域全体で課題解決をする仕組みづくり
- ・ 地域外の民間企業等との連携
- ・ 入湯税を活用（独自の上乗せ事例もあり）

### (3) 「新型湯治」の効果の把握と普及、全国展開

「新型湯治」を推進するためには、(1)、(2)の取組に加えて、温泉の効能のみならず、温泉地全体での療養効果等を科学的に把握し、その結果を情報発信することが重要である。

この新型湯治の効果は「温泉地ならでは」のものであり、この情報の把握や発信等により、プログラムをより磨きあげ、温泉地の更なるにぎわいの創出といった好循環を生み出していくことが可能となる。

#### 【具体的な取組例】

- ・ 環境省が調査フォーマットを提示するなどにより、全国の温泉地と温泉療法医等が連携してデータを蓄積・評価・公開する仕組みづくり
- ・ データに基づいた、より効果的な健康増進等のためのプログラムの提供
- ・ 国内外に向けた効果的な情報発信を行い、「新型湯治」を行うための温泉地訪問者数を増加させる
- ・ ストレス社会、健康長寿社会において、これまで以上に「新型湯治」の役割が大きくなることへの準備
- ・ 国民保養温泉地の新たな姿として、「新型湯治」の中核的な役割を担う温泉地としていく

以上